

# 芸事は自己責任。毎日を自分で責任もってやっているんだ。——三遊亭小遊三さん

## YAMANASHI People 甲斐のひと、インタビュー

### 三遊亭小遊三 (さんゆうてい こゆうざ)

1947年横浜市生まれ。小学生から大月で育ち都留高校卒業後、明治大学経営学科在学中に三遊亭遊三師匠に入門。卒業と同時に前座、三遊亭遊吉に。入門5年目、二つ目昇進と共に小遊三となり、入門15年目で真打昇進。以降、芸術祭優秀賞を受賞するなど、古典落語を中心に活躍。現在はテレビなどでの活躍が広く知られる。

趣味の卓球では、「らくご卓球クラブ」のヘッドコーチを務め、世界ベテラン卓球選手権大会に過去5回出場。ベスト16の成績を収める。また、はなし家バンド「にゅうおいらんず」を結成し、毎年8月に浅草で特別興行を行うなど、

取材協力：浅草演芸ホール



**八** 月吉日、東京都内の浅草演芸ホール。高座はトリで出演の三遊亭小遊三師匠。今回のインタビューは出演の約一時間半前に行われた。和装の印象が強い小遊三師匠だが、当日はシャツにチノパン姿で、新鮮なイメージだった。

小遊三師匠の生まれは横浜。四人兄弟の末っ子で、姉二人と兄がいる。横浜に住んでいた一家が、父親の定年退職を機に父母の実家がある山梨へ帰ってきたのは、師匠が小学校一年生の時のこと。鳥沢小学校、富浜中学校、都留高校と、「人格形成に必要なことはすべて山梨で学んだ」と師匠。大月で過ごした日々を誇りに思っている師匠は、「僕は大月生まれですよ」と公言する。

小遊三師匠が小学生だった昭和三十年頃はまだ田舎にテレビのない時代。地域社会のつながりが根強く、子どもたちの中でも年上の子が下の子に色々なことを教える「たて社会」だった。ところがいつの頃からか、「どんど焼きをするにしても子どもだけで火を使っちゃいけないとか、みこしを担ぐのも車が危ないからダメだとか言われるようになってきた」。

昭和三十四年、僕が中学一年生になるとテレビが普及し、情報が溢れてきた。年下の世代は、みんな塾通いをするようになって、子ども社会

も壊れ始めたんだよな」と残念そうに振り返っていた。

師匠が落語と出会ったのは、明治大学在学時。立ち寄った新宿「末広亭」で三遊亭遊三師匠の落語に魅せられ、弟子入りした。落語家になると決めたときには、両親にも素直に話せず実家を飛び出したという。下



積み時代は厳しい修行の毎日であったが、「芸事は自己責任。毎日を自分で責任もってやっているんだ。好きで選んだ道だから文句は言えないな」と語る師匠。現在ではお弟子さんを六人持ち、押しも押されぬ師匠として、落語芸術協会の副会長も務めている。

育った大月の家も幼少時代のまま残っており、現在は二番目の姉が住んでいる。いまは仕事柄、東京都内で暮らしているが、山梨に帰ることも多い師匠にとって、故郷は決して遠い存在ではないとのこと。「山梨に行くには土産を持って帰る感覚ではなく、ちよつと顔を出す感覚」な

### SANYUTEI KOYUZA



のだという。現在でも山梨県内の友人との付き合いは多く、毎年九月のお彼岸には、同級生が幹事となり、大月で開催される落語会がある。「山梨県は関東近郊でも落語人口が少ない」と分析する師匠。「落語家としては淋しい。これを機に落語に触れてもらえれば

小遊三師匠がさつそうと登場すると、観客の拍手も一段と大きくなった。円熟味を増した芸に聴きほれ、終わっても客席を立とうとしないお客さん。しばらくすると幕が上がり、浴衣姿の落語家たちがめいめい楽器を持って登場する。はなし家たちが集まって結成されたデキシーバンドだ。師匠はトランペットの担当で、こちらも見事な腕前である。途中、トロンボーン担当で静岡出身の春風亭昇太さんと、それぞれのお国自慢のトークで観客を沸かせ、故郷山梨をアピールする一幕もあった。

小遊三師匠は「都内在住の山梨県民」。「もっと発展して欲しい」と願うふるさと山梨県から観光大使の命を受けている。寄席を訪れたお客さんにも、時に「ふるさとやまなし」を紹介しながら気さくに話しかける姿に、エンターティナーとしてだけではない、甲斐のひとらしい実直で暖かい人柄を感じた。